

マタイによる福音書 19:16-30

8 月の平和月間も、今日の礼拝をもって間もなく終わりを迎えようとしています。そこで思うことは、平和を求める私たちの歩みには終わりはないということです。それは、世界を見回していくときに、ここかしこに争いがあり、また、私たちのその足下を見ていくときにも、私たちの心乱す事柄、出来事は日常的に溢れかえっているからです。私たちが平和を求めてやまないのはそれゆえのこともありますが、ただし、それは、個人的な不快感を取り除きたいからではありません。「平和をこそ、わたしは語るのに 彼らはただ、戦いを語る。」と神様が仰るように、平和こそが、神様が私たちに求めていることだからです。それゆえ、私たちは御心から外れ、道を誤ることを恐れます。それは、信仰をもってしてもなお、平和を破壊する悪しき力に抗えないことを知っているからです。長く信仰生活を過ごし、このことを強く実感している方は大勢おられることと思いますが、しかも、思い煩いの種は教会の外だけでなく、内にもある、それが私たちの偽ざる気持ちでもあるのです。ところが、古来「教会の外に救いはない」と言ってきたのが主の教会でありました。

パウロが「教会はキリストの体であり、すべてにおいてすべてを満たしている方の満ちあふれる場です」と言っているように、神様の祝福と平安に満ちあふれているのが、イエス様を頭とし、その御体である教会なのです。私たちが、先週学んだことはこの点を踏まえてのことでもあります。なぜなら、この神様の御心の内に今この時を生きているのがイエス様と共にある私たちであるからです。それゆえ、この恵みはこの御言葉に聞いている今この時に限ったことではありません。イエス様を見失い、イエス様を見失うがゆえにまた自らをも見失う、そのような時にも、この私たちと共にいてくださっているのが私たちの主、イエス様であるからです。従って、平和は、主にある私たちには常に絶えず約束されているものであり、まただから、この約束を信じる私たちは、誰とでも、いつでもどこでも、イエス様の平和を共に分かち合い、平和を実現することが許されるのです。イエス様がその私たちと共にあるということはそういうことだからです。

従って、私たちが神様の御心に従って平

和を作り上げるべく毎日を歩むのはそのためです。ところが、その私たちが心乱されるのはどうしてなのでしょう。それは、平和の実現を約束する御言葉と、私たちが生きるこの世の現実との間には、大きな隔たりがあるからです。けれども、そうであればこそまた、私たちは心を揺さぶられながらも、イエス様の救いの実現のために、それぞれの置かれたところで平和な関係性を築き上げようとするのです。そこで、その私たちの辿る道について、御言葉はこの日二つの道を示します。一つは、なんとか自分自身を立て直しながら歩もうとする者の姿です。それがイエス様に対し、「先生、永遠の命を得るには、どんなことをすれば良いのでしょうか」と問いかける富める青年の姿であり、そして、もう一つは、弱音を吐き、すべてを諦め投げ出そうとする弟子たちの姿です。それは、イエス様の言葉はそのあまりの厳しさに怖じ気づいてしまうことがあるからです。ですから、弟子たちの「それでは、誰が救われるのだろうか」と語るその態度はなんとも情けなく、まただから、イエス様もそんな弟子たちを励まそうとしたのでしょう。悲鳴を上げる弟子たちに向かい、イエス様は「それは人間にできることではないが神は何でもできる」とこう仰ったのです。ところが、それをいいことに、ペトロは、じゃあ「私たちに何をもたらえるのでしょうか」と思わず口走ってしまう始末なのです。しかし、弟子たちのご都合主義とも言えるこれらの態度をイエス様は頭ごなしに叱りつけることはなさいません。それは、この情けない姿を通して神様の深い愛を知ることになるのが、すべてを投げ捨てイエス様に従った弟子たちであるからです。

このように、平和を作り上げるべく歩む私たちの毎日は、人それぞれ、置かれたところで異なる姿を示すものですが、しかし、このまったく正反対とも言える姿の中に、私たちは、ある一つの共通点を見出すことができるのです。それは、私たちの、信仰に生きるからこそその拘りです。そして、その姿はまさに水と油、決して混ざり合うことはありません。それゆえ、それぞれがそれぞれの拘りを捨て去ることがなければ、イエス様の交わりに平和が実現することもありません。では、イエス様のお言葉によって彼らは拘りをすべて捨て去るこ

とができたのでしょうか。富める青年の姿は、信仰と生活を一致させようとする真面目さと、拘りを捨て去ることのできない頑なさが現わされていますが、では、弟子たちはどうでしょう。「私は何もかも捨ててあなたに従って参りました。では、私たちは何をいただけるのでしょうか」と言ったペトロのこの姿に、富める青年とはまた違った拘りを感じるの私だけなのでしょうか。従って、イエス様の言葉がどこまで人の心を動かすのかとも思うのです。まただから、「それでは、誰が救われるのだろうか」と語った弟子たちの気持ちがよく分かりますし、けれども、その一方で、私たちは、弟子ではなく、この富める青年への共感をも強くするのです。それは、私たちもまた拘りを捨て去ることができずにいるからです。

ところで、富める青年の問いかけに対して、イエス様が「なぜ、善いことについて、私に尋ねるのか。善い方はお一人である。もし、命を得たいのなら、掟を守りなさい」と答えたのでしょうか。それは、二週間前に申し上げたことでもありますが、神様の祝された領域の内と外とを示すものが十戒であり、十戒の語るどころの内側にあれば、救いを実感し、神様の御心に叶った日々を過ごすことができるからです。イエス様が十戒をそらんじたのは、そんなユダヤの常識に従ってのことでもありますが、ところが、富める青年はイエス様のこの言葉に心底納得できなかったのです。それは、そこで求められることのすべてを忠実に、しかも、隣人への愛を含め、徹底的に全て行っていたのがこの富める青年であったからです。ただ、そういう意味では、イエス様が「最も重要な掟」と語る神様への愛と隣人への愛に徹して生きてきたのがこの富める青年でもありました。けれども、その彼がイエス様に教えを請いにやって来た、それは、それでも安心することができなかつたからです。ですから、その姿は回心直前のルターの姿に重なる場所があります。それは、求められていることをやればやるほど、求められていることに追い立てられ、結果、この終わりの見えぬ毎日に疲れ果て、自分を見失ってしまうからです。

そして、それは、その人の持っている真面目さ、誠実さがそうさせるとも言えるのですが、ただ、弟子たちのように途中で投げ出し、外れることもできない、こうして青年は悩みを深めていくことになったのです。なぜなら、イエス様が「神は何でもできる」と仰り、また、詩編の御言葉が「あ

なたの律法を愛する人には豊かな平和があり、つまりさせるものはありません」と語るように、私たちの安全安心の拠り所は神様であり、御言葉の上をしっかり立つこと、これこそが、私たちが平安を得る上で最も大事なことでもあるからです。従って、この青年は、単に社会的に地位が高いというだけでなく、人間的にも信仰的にもかなり優れた人物であったように思います。もしかしたら、私たちが望む全てを兼ね備えている人物であると、そのように言ってもいいのでしょうか。しかも、十戒に加えて隣人愛をも徹底して行っていたわけですから、恐らくは、誰からも信頼され、愛される人物であったと思います。そして、それは、イエス様の問いかけに対して、「そういうことは皆守ってきました。まだ何か欠けているのでしょうか」とそう言っていることから分かります。

ですから、そういう意味では、自分自身にもかなり自信があったのでしょうか。一に徹するということはそういうことでもあるからです。しかし、それが鼻につくという者も必ずいるものです。しかも、弟子たちへの、イエス様のこの青年についての説明が「金持ちが天の国に入ることは難しい。重ねて言うが、金持ちが神の国に入るよりも、ラクダが針の穴を通る方がまだやさしい」という大変厳しいものであったことから、この青年の態度を金持ちゆえの偽善、余裕があるがゆえの傲慢と、この点から理解することもできるのでしょうか。そして、そうした意見が一定の支持を得るのは、偽善と完全に切り離されたところに立てる者は、その罪ゆえに一人もいないからです。それゆえ、「まだ欠けているのでしょうか」とこの問いかけは、傲慢の極みだとも言えるのです。けれども、この青年をしてそう語らせたものは、彼の生まれ持った偽善と傲慢さゆえのことなのでしょうか。

この青年の言葉だけを見るなら、確かにそう結論づけることもできます。けれども、この青年と対話しているのは私たちではなく、イエス様です。私たちはイエス様と一緒にこの青年の言葉を聞いているのです。ですから、この青年の問いかけは、いい加減な思いつきのようなものではありません。本気で真剣に必死になってイエス様に問いかけているのです。もしそうでなければ、この人が悲しみの中にイエス様のもとを立ち去る必要もなかったはずなのです。まただから、イエス様も本気で真剣に答えている。そうでなければ、イエス様も「もし完全になりたいなら、行って持ち物売り払い、貧しい人々に施しなさい。そ

うすれば天に富を積むことになる。それから、私に従いなさい」とこう答えることもなかったはずです。それは、イエス様に従うということは、神様の愛を知ることであり、そこにまたイエス様の真実な姿を見ることだからです。

ですから、イエス様のこの青年に対する厳しい態度は、そういう意味で、すべて分かった上でのことでありました。従って、それは、できもしないことを勧めるような、そんないい加減なものではありません。イエス様は人の足下を見て何かを語るような、そんなご都合主義なお方ではないからです。もし、仮にイエス様がそういうお方であるなら、イエス様の言葉ほど空しいものはないということにもなりますが、なぜなら、その言葉には必ず裏があるということになるからです。ならば、イエス様がその言葉通りに十字架に付いたのは、裏があることを見透かされたからなのでしょう。もし、私たちがそう思うなら、イエス様の仰ることも、又、御言葉の語ることも、中身の無い、人を迷わすだけのものになってしまいます。しかし、勿論、そうではない。イエス様の十字架がすべて明らかにするように、その言葉に嘘偽りはありません。ですから、イエス様が本気でこの青年と向き合っているのは間違いないことです。この青年の迷いや悩みに、イエス様は本気で応えようとされているのです。イエス様の「もし完全になりたいのなら」というこの言葉を、ある人が「脇目も振らず一途に」と解釈したように、本気でひたむきに、一途にこの青年に応えようとされているのが私たちのイエス様であるのです。

ただ、それだけにまた、イエス様のこのまっすぐさがこの青年を躓かせましたのです。それは、イエス様が相手の事情を考えないお方だからではありません。持ち物を全て売り払って、貧しい人々に施し、一切無一物になることの難しさ、それがどれほど難しいかは言を俟つまでもないことです。ですから、それについてはイエス様にも十分に分かっておりました。ざわつく弟子たちに対して、語ったその説明の極端さがこの点を明らかにしてくれているように思います。つまり、それがそれほどまでに大きなものであったということです。弟子たちが理解を閉ざし、こうして御言葉に聞いている私たちをも混乱させているのはそのためです。けれども、イエス様は特定の立場、高い能力を持つ者を蔑んで、そして、「はっきり言うておく。金持ちが天の国に入ることは難しい。重ねて言うが、金持ちが神の国に入るよりも、ラクダが針の

穴を通る方がまだやさしい」と、こう仰っているわけではありません。その人の身になって、その気持ちを汲んで、イエス様はその人のために物事の道理を語っておられるのです。それは、はっきり、重ねて、と、強い調子で語るイエス様のそのお言葉が示すように、その拘りを捨て去ったところに置かれているものが彼の求める永遠の命であり、また、弟子たち、私たちの求める神様の救いでもあるからです。

旧約聖書の世界観においては、富は神様の祝福の証しでもありました。富める青年が十戒に忠実に従って、神と人にとに仕える歩みをしてきたのは、このように祝福された者の信仰理解にしっかり立とうとしたからでもあります。ですから、そう考えるなら、弟子たちの驚きはイエス様のその厳しさだけが理由であったわけではありません。イエス様がこのユダヤの伝統的価値観を否定したかのように思えたからです。けれども、ここにこそ、私たちはイエス様の新しさを見ることができのです。なぜなら、イエス様によって、今、いかなる世界が開かれようとしているのでしょうか。ここでの厳しい発言は、今まさに世界が新たな局面に入ろうとしていることを明らかにしてくれているのです。それがイエス様の十字架の出来事であり、それは、イエス様が「それは人間にできることではない。神はなんでもできる」と仰るように、間もなく訪れようとしているこの十字架の出来事の中に、この青年の求めるものも、また、弟子たち、私たちの求めるものも、それぞれが置かれているからです。従って、イエス様の厳しさの真意は、拘りを捨て去ることができずに悩み、また戸惑う者を十字架というこの新しさの中に導こうとしたことであつたのです。ですから、捨てよ、従え、と仰るイエス様のお言葉は、イエス様と共にあればこそ開かれる、この新たな世界への招きの言葉でもありました。

そして、この招きに応えたのが、弟子たちであり、私たちであります。ところが、拘りを手放すことのできないこの富める青年は、どうしても、その一步を踏み出すことができなかつたのです。それゆえ、ここに、私たちは、救われるものと救われない者との明らかな違いを見ることになるのですが、けれども、その一步を踏み出した私たちが、自分は必ず救われるとの確信をどこまで持っているのでしょうか。ですから、そこで興味深いのは、新しい世界が開かれようとしているその最中であつて、何かを期待せずにはいらなかつたペトロ

のその姿です。どうしてここでこんな軽率なことを口走ったのか、その真意については直接ペトロに聞いてみるしかありませんが、けれども、それが信仰を持って歩むペトロの一つの拘りであったのでしょうか。ですから、富める青年と比べ、ペトロのその姿は余りにも貧相です。けれども、このペトロに向かって、イエス様が仰ったことが、「はっきり言うておく。新しい世界になり、人の子が栄光の座に座る時、あなたがたも、私に従ってきたのだから、十二の座に座ってイスラエルの十二部族を納めることになる。私の名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子ども、畑を捨てたものは皆、その100倍もの報いを受け、永遠の命を受け継ぐ」という、この力強い言葉であったのです。

では、ペトロの求めに応じて、イエス様がこのように具体的なことを語るのはどうしてなのでしょう。それは、新しい世界に招かれているのが弟子たちはじめ、私たちであるからです。そして、十字架が近づきつつあるこの時、イエス様のその目にはこの具体的なものがはっきりと見えていたのです。ですから、そういう意味で、臆せず、たとえそれがどんなに軽率なものであっても、ペトロのようにイエス様には何でも言うてみるものなんだと思います。それは、それが許されているのが私たちであるからです。そして、ここの所毎回皆さんに申し上げている「恵みの場」とは、つまりは、それが許されている場所だということです。なぜなら、イエス様が「神は何でもできる」と仰るように、神様の子どもとして、素のままの自分を出し、無邪気にすべてをお願いすることができる、それがイエス様と私たちの関係性であるからです。そして、そのことを誰よりも強く望んでおられるのが私たちのイエス様であります。ですから、このことはまた、実際、ここで言葉によって言い表されているわけではありませんが、イエス様が私たちに望んでおられることが今申しました通りであるなら、この富める青年に対するイエス様の本当の思いを、私たちはそこから感じ取っていいようにも思うのです。

イエス様が「神様は何でもできる」と仰ったことは、その人が何を考え、どう思おうとも、また、イエス様に背を向ける者さえも、イエス様は神様の子どもとして扱ってくださっているということです。そして、これこそがこの青年の求める答えでもありました。ところが、拘りを捨て去ることができないために、この青年は悲しみの内にその場を立ち去ることになったので

す。ですから、このことはこの青年にしっかりと記憶されたに違いありません。それゆえ、イエス様との出会い、その言葉は生涯忘れ得ぬものとなり、なにかにつけ思い出されたことなのでしょう。ですから、時が訪れた時、その言葉の意味を、イエス様の本心を、この青年ははっきりと知ることになったはずで、その一つがイエス様の出来事の後、約40年後のことでした。ローマによってイスラエルが滅ぼされたその時、彼自身が拘るものの一切が力尽くで奪い去れることになったはずで、そして、もう一つが、自らの生涯を終える時です。それは、拘りを捨て去って、イエス様にすべてを委ねる時だからです。このように、イエス様との出会いを経験したこの富める青年は、必ずやイエス様のこの時の言葉を思い出し、すべてを手放し、その言葉に従ったはずなのです。

ただ、このことは、御言葉に記されていることではありません。私の勝手な想像に過ぎないことです。ですから、それは間違いだ、勝手なことを言うなと言われれば、返す言葉もありません。その通りだからです。しかし、私たちの求めることも、イエス様が求められることも、言葉という者を大切にしつつも、それは人の言葉の解釈やその定義などではありません。イエス様が望んでおられることは、その御心と私たち自身とを重ね合わせることであり、なぜなら、新しい世界への一歩は、ここから始まるものでもあるからです。ですから、そこで改めて思うことは、今日の最後のところでイエス様が仰っている「先にいる者の多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になる」というこの言葉の意味です。それは、イエス様が共にいること、共にあることを信じる私たちの信仰は、後先を気にして、ああだこうだと批評する、それだけのものではないからです。もっと生き生きとしたものであり、それゆえ、後先を考えずとも、私たちの生涯をもっと豊かなものとしてくださるものでもあるのです。それゆえにまた、富や地位、功名心といった、あらゆる束縛から私たちを解き放ってくれるのです。そして、それがこの平和月間を通して、私たちが一緒に唱えたアッシジのフランチェスコの平和の祈りの中に現されているものでもありました。ですから、私たち自身が平和を実感し、平和を築いていくためにも、来週から始まる新しいその歩みにおいて、引き続き、聖フランチェスコの平和を祈りを祈り、その祈りを自分自身の祈りとして、口ずさんで参りたいと思います。祈りましょう。